

い葉っぱがこれ。黄葉鮮やかに秋を彩り、冬は黄色い絨毯のように散り敷く落ち葉、四季の変化を映して一年中私たちの目を楽しませてくれます。

雌雄異株、学校のは雄。銀杏はなりません。植栽としては雄の方が好まれるようですが、雌は熟した果肉の悪臭が嫌われるからでしょうか。串刺しの焼いたギンナンで一杯呑むのは好きな人が多いようで、人間は勝手なものです。



(画) 園田 絃章

メタセコイヤ同様太古のままの生き残り、典型的な裸子植物。種子になる胚珠と呼ばれる部分がむき出しになっているのが雌花です。

古木になると、幹や枝から乳房のように根を垂らすものがあり、子授け銀杏と言われるものが全国各地にあるそうです。

カシワ

流水池の給水口付近、岩石園の中にこの樹があります。

柏餅でお馴染みですから、すぐそれとわかります。

冬、葉はすっかり枯れても枝を離れません。春、新芽が生まれるのを待っていたように散っていきます。

昔の人は、この生え替わりを慶祝のしるしとして大切にしましたし、縄文の昔から、葉は皿や包装用にと便利に使われていました。

大きな葉は長さ30センチ幅20センチにもなるそうで、そんな柏餅はいかがですか。特別におめでたいことがある日には。

枯れた葉はセピヤ色のオブジェ、冬の庭にしっとりと趣を添えてくれます。

コルク質の樹皮のお陰で山火事や野火に強く、また根が深いので大風に強いというわけで、安全を守る樹とも思われていました。

トチノキ

体育倉庫のすぐ脇にあります。

5~7枚の大きな長卵形の葉が集まって天狗の羽団扇のようです。

栗に似て光沢のある褐色の実をつけますが、この実を粉にして煎餅や餅にした製品もあるそうです。しかし、たいへん苦い渋があり、食用するにはとても手間のかかるものです。また、そのまま空腹のネズミにやれば三日で死んでしまう毒性も持っています。毒性の名はサポニン、適量であれば、風邪のと



(画) 原 令

きの痰を切る薬にもなる性質です。サポニンは水に溶かすと泡立つ性質があるそうで、子供の頃、シャボン玉の液にトチの実を砕いて混ぜていたことを懐かしく思い出しました。

大木になり夏の陽を遮る並木にもよく使われます。パリの並木道で有名なマロニエはセイヨウトチノキ、類似の樹木ということです。

学校便り 11月号 (6・11・1)

ハナミズキ

明治45年、当時の東京市長尾崎行雄がアメリカにサクラの木を贈りました。大正4年、その返礼としてアメリカからハナミズキが贈られて来ました。

その木は、日本に野生するヤマボウシと同類の木でしたから、アメリカヤマボウシと呼ばれました。最近、アメリカハナミズキという特別な品種があるように言われるのは、混同によるもので正しくはないのでしょうか。

花の様子は、このシリーズの冒頭に掲げましたヤマボウシと同じで、苞と呼ぶ花弁のような葉の中心に小花が球形に集まっています。秋、小花は先の尖った赤い実になります。

この苞が赤いものをベニバナハナミズキと呼びますが、本校には白と赤と両方のハナミズキがあります。

運動場の南側、赤レンガの花壇に並んで立っています。

サクラ

ついでですから、本校のサクラについてもここで触れることにします。

給食室の横の斜面に3本のソメイヨシノが植えられています。それから、東側の斜面、防球ネットの外にも1本。まだ小さいのですが、成長の速い木です